

ラテン語における動作主補語を伴う 非人称受動について

小倉 博行

ラテン語の非人称文は、本来的に非人称的に用いるもの（*pluit*「雨が降る」など）があるが、それに加えてそれ以外の一般動詞も三人称単数受動態の語尾をとって非人称に用いることができる。ところで非人称文は一般に、「事行そのものを提示する」というのが本質的な機能であるとされる。動作主が存在前提とならないラテン語の天候文などはまさにこうした例である。また、非人称受動についても同様で、

(1) Le passif se prêtait à l'emploi impersonnel en mettant en retrait le sujet agissant. Ernout-Thomas (1953:204)

(2) Quant au passif, il n'était pas inutile. C'est la forme qui s'emploie d'une manière naturelle quand on énonce un procès sans en indiquer l'agent. Ainsi *dicitur* «on dit». Meillet (1966:257)

といった規定が与えられている。ラテン語で *eo* と言うと、「行く」という行為を担う主体が 1 人称単数であることが明示されるのに対して、3 人称単数受動態 *itur* は動作主の存在を不問に付すような場面で用いられる。

ところで、頻度こそ少ないものの実際には動作主補語を伴う非人称受動文が存在する。

- (3) Ibi cum alii fossas complerent, alii multis telis coniectis defensores vallo munitionibusque depellerent, auxiliaresque, quibus ad pugnam non multum Crassus confidebat, lapidibus telisque subministrandis et ad aggerem caespitibus comportandis speciem atque opinionem pugnantium praeberent, cum item *ab hostibus* constanter ac non timide *pugnaretur* telaque ex loco superiore missa non frustra acciderent, equites circumitis hostium castris Crasso renuntiaverunt non eadem esse diligentia ab decumana porta castra munita facilemque aditum habere. (*B.G.*, 3, 25, 1)

「そこである者は壕を埋め、ある者は多くの槍を投げて防戦する者を堡壘や要塞から蹴散らし、そしてクラッススが戦いに関してあまりあてにしていなかった援軍が石や槍を供給したり土手に芝草を運ぶなどして戦う者の姿と期待を示し、敵の方も絶えずそして臆することなく戦い、上から投げられた槍が無駄なく降ってきたのだが、騎兵は敵の要塞を一回りしてクラッススに伝えた、第十門は陣営の固め方が細心ではなく容易に近づけると。」

動作主の非明示とする従来の非人称文の規定だけではこうした現象を説明することは難しいだろう。また、統語レベルで抽出される *ab hostibus pugnaretur* の意味内容は、それぞれ人称文 *hostes pugnarent* と等価である。同じ内容を表す二つの異なる構文が存在する、ということは統語以外のレベルで両者の選択が行われていると考えられる。そこでこれらの動作主補語を伴う非人称受動文を、対応する人称文と比較してみる。

- (4) Interim nostri milites impetum hostium sustinuerunt atque amplius horis IIII fortissime *pugnauerunt* et paucis vulneribus acceptis complures ex iis occiderunt. (*B.G.*, 4, 37, 3)

「その間、我が軍は敵の攻撃に持ちこたえ、四時間以上に渡ってこ

の上なく激しく戦い、わずかの負傷者がでたものの、それ以上の敵を殺した。」

- (5) At illi intermisso spatio imprudentibus nostris atque occupatis in munitione castrorum subito se ex silvis eiecerunt inpetuque in eos facto qui erant in statione pro castris collocati acriter *pugnaverunt*, (*B.G.*, 5, 15, 3)

「そして彼らは、期間をおいて、我が軍が不用心になって陣営を固めることに専心していたときに、突然、森から出てきて陣営の前で歩哨に立っていた者に攻撃をしかけ、激しく戦った」

- (6) At tanta militum virtus atque ea praesentia animi fuit ut, cum undique flamma torrerentur maximaque telorum multitudine premerentur suaque omnia impedimenta atque omnes fortunas conflagrare intellegerent, non modo demigrandi causa de vallo decederet nemo, sed paene ne respiceret quidem quisquam, ac tum omnes acerrime fortissimeque *pugnarent*. (*B.G.*, 5, 43, 4)

「しかし兵士の武勇とその沈着ぶりというのは、至る所で炎が燃えさかり、数多くの槍に悩まされ、自分の装備品や財産が全て燃えるのを見てとりながらも、その場を立ち去ろうと堡壘から降りる者が誰もいないばかりではなく、ほとんど誰もが後ろを振り返ることなく、全員が激しく勇猛果敢に戦ったほどである。」

- (4)と(6)は、ローマ軍の視点から事態が記述されており、動詞 *pugnare* の主語にはその視点に沿ってローマ軍が選ばれている。(5)は敵側の行動であり、*pugnare* の主語は敵である。これに対して動作主補語を伴う非人称文(3)は、ローマ軍側の視点に立った記述に、敵の戦いぶりが埋め込まれているかたちになっている。

ところでこの「視点」をトピックと考えると、言語類型論などの立場では主語位置がもっともトピック性を獲得しやすいとされている。動作主補語を伴う非人称受動文は、トピックとしては不適切な要素を降格、すなわち主語位置から外すことによって生じたものと考えることができる。

『ガリア戦記』において動作主補語のない非人称受動文 *pugnatur* は両軍の戦いのことであるが、これに *ab utrisque* と両軍を表す動作主補語を付ける例もある。

(7) *Summa vi ab utrisque contenditur. Laborantibus nostris Caesar Germanos submittit legionesque pro castris constituit, ne qua subito inruptio ab hostium peditatu fiat. (B.G., 7, 70, 2)*

「両軍が力をふりしぼって張り合う。我が軍が苦戦するとカエサルはゲルマニ族を援軍として送り、軍団を陣営の前に据えた。こうすることで敵の歩兵によって不意の突撃がなされないようにである。」

これに対して人称文は必ず敵あるいはローマ軍の戦いぶりである。

(8) *Qua de causa Helvetii quoque reliquos Gallos virtute praecedunt, quod fere cotidianis proeliis cum Germanis contendunt (B.G., 1, 1, 4)*

「同じ理由でヘルウェティ族もまたそれ以外のガリ族よりも武勇の点で秀でている、というのもほぼ毎日の戦いでゲルマニ族と張り合っているからである」

人称文においては「両者が戦った」という文脈で用いられる例は観察されない。これは、そのテキストの性格上、どちらが何をしたかということが話の展開の中心であり、その意味でトピック位置である主語に置か

れるのは敵あるいは味方（またはそれぞれの側の構成員）になりやすいためである。従って両軍という全体を俯瞰するような要素は人称文の主語位置の性質と折り合いが悪く、明示される場合は補語の位置に降格させられると考えることができる。

このように、非人称文の本質機能をさらに掘り下げて談話レベルで考察すると、その用法に新たな解釈を導入することが可能になると思われるのである。

参考文献

- Ernout, A. & Thomas, F. (1953) : *Syntaxe latine*, Klincksieck, Paris.
- Gaaton, D. (1998) : *Le passif en français*, Duculot, Paris.
- Givón, T. (1983) : "Topic Continuity in discourse" dans *Topic Continuity in Discourse: A Quantitative Cross-language Study* (ed. by T. Givón), pp.1-41, John Benjamins, Amsterdam.
- Meillet, A. (1966) : *Esquisse d'une histoire de la langue latine*, Klincksieck, Paris.
- Merguet, H. (1966) : *Lexikon zu den Schriften Cäsars*, Olms, Hildesheim.
- Pinkster, H. (1985) : "The Discourse Function of the Passive" dans *Syntax and Pragmatics in Functional Grammar* (ed. by A. M. Bolkestein et al.), pp.107-118, Dordrecht, Foris.
- (1992) : "The Latin Impersonal Passive" dans *Mnemosyne XLV*, Fasc. 2, pp.159-177, E.J. Brill.
- Risselada, R. (1991) : "Passive, Perspective and Textual Cohesion" dans *New Studies in Latin Linguistics* (ed. by R. Coleman), pp.401-414, John Benjamins, Amsterdam.
- Mellet, S., Joffre, M.D. & Serbat, G. (1994) : *Grammaire fondamentale du latin : Le signifié du verbe*, Peeters, Louvain.

(おぐら ひろゆき)